2022 年
8月

マナ通信

今月のマナ通信は、
◎６月の聖書日課（ローマ人への手紙、箴言、マルコの福音書）
◎土・日曜日の学び（教会の誕生と宣教の始まり）　の感想です。

ロマ書を学んでます。福音とはなんぞや、解ったようで解っていません。ロマ書８章28節のように、全てのことを益として下さる信仰生活にあこがれます。福音を少しでも理解するために福音について書いてみました。

解説では、神の義は１章17節から３章21節に続くと云われています。

「私は福音を恥としません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、信じるすべての人に救いをもたらす神の力です。 福音には神の義が啓示されていて、信仰に始まり信仰に進ませるからです。『義人は信仰によって生きる』と書いてある通りです。

しかし今や、律法とは関わりなく、律法と預言者たちの書によって証しされて、神の義が示されました。

すなわち、イエス・キリストを信じることによって、信じるすべての人に与えられる神の義です。そこに差別はありません。すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです。 神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。」（ロマ1:16-17,3:21-25）

ここでは神の義が非常に重要になって来てます。神の義は聖書の中心的な事柄であり、この神の義は律法という形で人間に示されています。我々人間は罪を持ったままで、聖書の教えを行うことが出来ません。その為、救いの道は、神の義以外にはないのであって、それは福音の中に啓示されており、その福音こそが「信じる人には誰でも救いを与える神の力」であって、この救う神の力としての福音以外に、私たちの望みはないのです。誰一人として、自分の力によって天国への階段を昇って行くことが出来ないのです。キリスト教の核心である福音は、この「義」の上に成り立っています。

聖書は一貫して新約も、旧約も福音について語っており、ただ１度だけ、１つだけの救いについて述べられています。「旧約は新約の中に現され、新約は旧約の中に隠されている」と云われています。

しかし今や、神の義が示されたと云ってますが、すでに用意されていたものが、現れたのです。これは救いの道です。永遠の昔に神が用意していて下さったのです。

人間は神に似た者として創造され神との交わりの中で生活してましたが、神が食べてはいけないと云う善悪の実をサタンの誘惑にあい食べてしましました。もともと、善悪は神が決めるもの、人間はその領域を侵してしまったのです。その後、人間は神に対して不従順とみなされ、罪人となったのです。しかし神は人間を救い出す手はずを既に整えていて下さっていたのですね。

神はその聖ゆえに、その正しさゆえに罪と罪を犯した者に対して、これを罰しないでおきません。これが、神の義の要求です。この神の義の要求を神は御子によって全うされました。御子イエス・キリストは私たちの罪を背負われ、その罪のために十字架上で、神から罰を下され死なれました。それは私たちの身代わりとなって下さったのです。こうして、神の義の要求が全うされることによって、神はこのキリストを信仰によって受け入れる者を、救って下さいます。つまり、キリストに免じて、罪を赦して下さるのです。

私たちはキリストが十字架で流して下さった血によって、神のものとして買いとられ、神のものとされました。主との交わりに入れられたのです。聖餐の礼典は、忘れやすい私たちを、そのことを忘れ無いように、パンと杯に預かるのです。十字架こそが、神の愛の要求と同時に、神の義の要求が満たされたところです。この事によって、神の正義が貫徹されたのです。

キリストの十字架には２つの意味がありました。１つは神の義が現されたこと。もう１つは、私たちが信仰によって義と認められる基礎が与えられたということです。私たちはしっかり、イエス様を見つめ、心にとめ、イエス様を第一として生活して行こうではありませんか。（畑中伸之）

主よ、この罪を彼らに負わせないでください。』こう言って彼は眠りについた。」（使徒7:60）

ステパノは石をを投げつけられながらも、自分に石を投げている者たちの為に祈っています。あのカルバリの十字架上のイエス様のように・・・・・・

「その時、イエスはこう言われた。『父よ、彼らお赦しください。彼らは、自分が何をしているかがわかっていないのです。』」（ルカ23:34）

真にイエス様の贖いの死を理解し、神様のご愛を悟った人は、イエス様のように罪人を憐れむ人になるのだと解りました。殉教者ステパノはその境地に達していた人でした。

畑中姉妹が、元隣人の為に苦しみましたが、召される前にはその人とお姉さんが救われますようにと祈っておられたと、前回のマナ通信で兄弟が語っておられました。悪口を言われたり、意地悪く扱った人に対して、とりなしの祈りをしておられたとは、姉妹の心の中心が主にあって守られていましたことの証しであると知り、主を賛美いたしました。私自身の魂もそのように導かれたいと心より願わされました。

「主は、私たちの罪にしたがって私たちを扱うことをせず。私たちの咎にしたがって私たちに報いをされることもない。」（詩篇103:10）（福島三弥子）

箴言はその通りとすぐに心に入ってくる節と、これは何を言いたいのだろうかというのがあります。14章12節の同じ文言が16章25節に再び出てきます。重要な事なのでしょう。

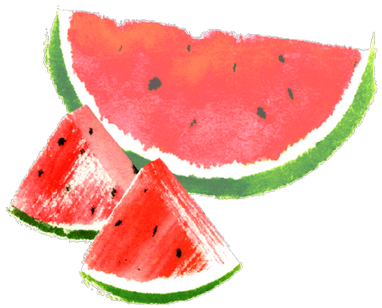
自分の前の道がまっすぐというのが理解できました。自分は正しくて周りが間違っていると、思いがちです。

自分は間違わないと思うのではなく、謙遜を持って、しっかりと冷静に吟味することが大事なのですね。

判断するには御言葉に聞き、主を畏れることを、第一にしなければと肝に銘じました。

「人は心に計画を持つ。しかし舌への答えは主からくる。」（箴言16章1節）

主に委ねるとは、主に丸投げすることではなく、計画をたてて、その上で不完全な面を主に補って頂けるという幸いに信頼したいと、思わされました。



マルコ2章3節の中風の人の話を読む毎に、うらやましいな、果たして私にはかついでくれる人がいるかと、思っておりました。今回解説を読んで、そういうことなのかと、感激でした。同時に私はなんと恩知らずで感謝をないがしろにしているかと、恥ずかしくなりました。

私が信仰を持ち、ここまで続けられたのは、ずいぶん沢山の人に担いで頂いていました。感謝を忘れていました。（広瀬裕子）

あなたのわざを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画は堅く立つ。」（箴言16:3）

私はこのみことばが好きで、大学生の頃、机の前に貼っていました。自分の将来とか、なりたい自分になるための計画を立てては崩し、立てては崩し、で20年経ったと言えるかもしれません。今の私も「なりたい自分」「理想の生活」を追い求めています。

「人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、主が人の歩みを確かにされる。」（同16:9）

人はいろいろと考えて生きているけれども、主にゆだね、主が歩みを確かにしてくださるという信仰を土台として、考え生きることを薦めている箴言だと思います。（永井亮子）

さてその日、夕方になって、イエスは弟子たちに「向こう岸へ渡ろう」と言われた。そこで弟子たちは群衆を後に残して、イエスを舟に乗せたままお連れした。ほかの舟も一緒に行った。すると、激しい突風が起こって波が舟の中にまで入り、舟は水でいっぱいになった。ところがイエスは、船尾で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生。私たちが死んでも、かまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって風を叱りつけ、湖に「黙れ、静まれ」と言われた。すると風はやみ、すっかり凪になった。イエスは彼らに言われた。「どうして怖がるのですか。まだ信仰がないのですか。」彼らは非常に恐れて、互いに言った。「風や湖までが言うことを聞くとは、いったいこの方はどなたなのだろうか。」（**マルコ4:35-41**）

イエス様と弟子たちは、ガリラヤ湖の向こう岸へ渡るため、舟で進みます。すると激しい突風が起こって、波が舟の中にまで入ります。舟は水でいっぱいになり、弟子たちは怖がります。

イエス様は、なんと船尾で眠っておられました。父なる神様への深い信頼ゆえに、平安のうちに眠っておられたのでしょう。弟子たちは「私たちが死んでも、かまわないのですか」と不満を表しました。

イエス様は起き上がって風を叱りつけ、湖に「黙れ静まれ」と言われます。風はやみ、すっかりなぎになりました。

イエス様は「どうして怖がるのですか、まだ信仰がないのですか」と弟子たちの信仰を注意されます。

私は、人生の嵐である、挫折、失敗、病気、経済的な問題、人間関係、家族の問題、職場の問題等、いろいろな嵐を経験してきました。それらの嵐のお陰でイエス様に出会うことができました。

どんなに嵐が吹き荒れようとも、その嵐をイエス様は鎮めてくださいます。「私の人生の舟」に同船していてくださるイエス様を見続けてゆきたいと思います。（木村邦夫）

もしあなたが苦難の日に気落ちしたら、あなたの力は弱い。死に渡されるために捕らえられた者を救い出し、殺されようとしてよろめき歩く者を助け出せ。あなたが『そのことを知らなかった』と言っても、人の心を評価する方は、それを見抜いておられないだろうか。あなたのたましいを見守る方は、それをご存じないだろうか。」（**箴言24:10-12**）

私たちの力は弱い。けれども、そのような時でも主は見守り続けてくださいます。今年は、関東甲信越地方が、6月中に梅雨明けし、猛暑が続いています。高崎でも、40℃を越えた日が何日もあります。このような状況の中でも、力強くわざをなしてくださる主がおられます。『箴言』は、主を恐れることにこそ、本当の希望があると教えています。主の知恵に従って、この暑い夏も生きることができますようにと祈ります。（外處トミ）

この暑さ　主はご存じで　我々を
見守り続け　益となし給う

2022年6月30日

いつもマナの感想文を読ませていただいています。7月の畑中兄弟の感想文を読んで、若い時から、いろいろとご苦労があったんですね。読んでいて、涙がこぼれてしまいました。イエス様が見守っていてくれたのですね。（外處ヌイ子）

群馬県　中之条ガーデンズのバラに囲まれた泉

あなたのなすべき事を主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計るところは必ず成る。……いつくしみとまことによって、とがはあがなわれる、主を恐れることによって、人は悪を免れる」（**箴言16:3,6**）

神様は私たちひとりひとりをお創りになりました。創って終わり、ではなく、見守っていてくださるどころか、いつも私たちを守り導いてくださいます。

弱く罪深い私たちが、悪を免れる方法まで備えて助けてくださる主を、今日も信じて、より頼んで歩んで行きたいです。（外處光歩）

あなたのわざを主にゆだねよ。そうすれば、あなたの計画は堅く立つ。人は心に自分の道を思い巡らす。しかし、主が人の歩みを確かにされる。」（**箴言16:3, 9**）

事の成否を分けるのは、自分の努力ではなく、私の歩みを確かにされるのは主であることを覚えます。主のみこころに従って歩むことができますように。また、一つひとつの出来事に信仰を働かせて歩んでいくことができたら幸いです。（外處結実）

怠け者よ。蟻を見習いなさい。蟻のやり方を見て学びなさい。蟻には働けと命じる支配者がいません。それでも夏の間懸命に働き、冬の食料を集めます。ところが、あなたがたは眠っているばかりいます。いったいいつ目を覚ますのですか。」（**箴言6:6～9**）

これから食料危機になると騒がれています。Youtubeでは多くの投稿で、備蓄を勧める内容が多く紹介されています。確かに、ガソリン代や食品価格が値上がりしており、本格的な危機がもうすぐ始まるという噂が多いので、缶詰などを買っておくようにしています。しかし、心の中ではそのうちに元に戻ると思ってしまう安易なところがあり、本格的な準備までは至っていません。

一方、聖書ではマタイ25章1節～天の御国のたとえで、ともしびを持って花婿を迎える十人の娘のう

ち油を用意しておいた５人だけが花婿を迎えることが出来て、婚礼の祝宴に行くことができたと記されています。霊的な準備の方がはるかに大切です。

安易に先のことだと思って、怠けた信仰でいてはいけないと示されます。食糧危機が訪れて命を失ったとしても、御国への準備ができていれば、安泰なのですから。いつでも主にお会いできる信仰を持って、日々を歩ませていただきたいと思います。（外處徳昭）

バプテスマのヨハネが荒野に現れ、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。ユダヤ地方の全域とエルサレムの住民はみな、ヨハネのもとにやって来て、自分の罪を告白し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けていた。ヨハネはらくだの毛の衣を着て、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。ヨハネはこう宣べ伝えた。「私よりも力のある方が私の後に来られます。私には、かがんでその方の履き物のひもを解く資格もありません。私はあなたがたに水でバプテスマを授けましたが、この方は聖霊によってバプテスマをお授けになります。」そのころ、イエスはガリラヤのナザレからやって来て、ヨルダン川でヨハネからバプテスマを受けられた。イエスは、水の中から上がるとすぐに、天が裂けて御霊が鳩のようにご自分に降って来るのをご覧になった。 すると天から声がした。「あなたはわたしの愛する子。わたしはあなたを喜ぶ。」（**マルコ1:4-11**）

ナザレでの「沈黙の30年」は今や終わりを告げ、イエス様はいよいよご自分の公生涯に入って行かれました。ナザレから100㎞あまり旅して、エリコのそばのヨルダン川まで行かれました。主はそこで「ヨハネからバプテスマを」お受けになられました。

それまでヨハネはイエス様のことを次のように証ししていました。

「私はあなたがたに、悔い改めのバプテスマを水で授けていますが、私の後に来られる方は私よりも力のある方です。私には、その方の履き物を脱がせて差し上げる資格もありません。その方は聖霊と火であなたがたにバプテスマを授けられます。また手に箕を持って、ご自分の脱穀場を隅々まで掃ききよめられます。麦を集めて倉に納め、殻を消えない火で焼き尽くされます。」（**マタイ3:11-12／ルカ3:16-17／ヨハネ1:26-27**）

そのような証しをしているヨハネのところに、イエス様はそのヨハネからバプテスマを受けようと来られました。ヨハネが授けていたバプテスマは、悔い改めのバプテスマであり、自分の罪を告白して受けるべきものでした。しかし、イエス様は、告白すべき罪も悔い改めなければならないものも何一つ持ってはおられませんでした。それなのに、なぜバプテスマを受けるために、ヨハネのもとに来られたのでしょうか。このような疑問は、当のバプテスマのヨハネによって発せられております。

ヨハネは、ただ心の中で疑問を持ったばかりでなく、罪のないイエス様に、イエス様には悔い改めるべき罪がないことを知ったヨハネは「びっくり」、バプテスマを施すことに対して異議を申し立てました。自分こそ、このお方から聖霊と火とによってバプテスマを受けなければならないという理由で、「極力断ろうとして」いるのです。（**マタイ3:14**）。

イエス様はそれを否定することなく、ただ、バプテスマを受けることを再び申し出られました。

「『今はそうさせてほしい。このようにして正しいことをすべて実現することが、わたしたちにはふさわしいのです。』そこでヨハネは言われたとおりにした。」（**マタイ3:15**）。

ここでイエス様が使われた「正しいこと」（半 δικαιοσύνη ／デカイオスネ） とはいったい何を指しているのでしょうか。原語において「正しいこと」とは、律法との関係において使われていることばです。「正しいこと」とは「このような正しいこと」であって、それは明らかにヨハネによるバプテスマを指しています。

ヨハネによるバプテスマがなぜ「正しいこと」なのでしょうか。「正しいこと」とは、神がそれを行うように命じておられる神の御心のことです。ここでは、神の御心の一般原則ではなく、明らかにヨハネのバプテスマという一つの具体的な事柄に関して、イエス様とヨハネがそれを与えられている神からの使命に従わなければならないという意味での「正しいこと」なのです。

イエス様ご自身は罪のないお方でしたから、罪を悔い改めるバプテスマなど受ける必要がないというヨハネの拒絶は、一応もっともなこと。しかし、ヨハネが神から遣わされた使命、およびイエス様が御父から遣わされた任務という見地からすれば、イエス様がヨハネからバプテスマを受けられることは、正しいこと、当然のことであったのです。

それでは、その「正しいこと」と言われていることの内容は何であったでしょうか。イエス様ご自身が罪がないのに、ヨハネのもとに来られ、ヨハネが拒絶したにもかかわらず、それを止めて「正しいこと」の遂行を主張されたのは、どういう意味を持っているのでしょうか。

イエス様は全然罪を持っておられませんでした。にもかかわらず、イスラエルの人々と同じようにバプテスマを受けられました。それは、イエス様の本来の使命と関係があります。その誕生に先立って、イエスと名付けられるようにと天の御使いが語っている時、すでに示されています。「マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」（**マタイ1:21**）

民の罪の身代わりとして、民を罪より救われる救い主イエスは、その全生涯、ことに公生涯を通して、そのことを世に表されました。そのことは、このバプテスマの出来事の中にも表されています。実に、イエス様はバプテスマを受けられました。それは、「人々の罪を背負われた救い主として、身代わり」という意味を持ったバプテスマだったのです。

主が全身を水に浸されたことによって、神のさばきの大水という「バプテスマ」（**マルコ10:38／ルカ12:50**）をカルバリでお受けになることが前もって示されたのです。

主がバプテスマを受けられたことによって、主が最後に受けられる「バプテスマ」、すなわち、「カルバリでの死」と「死者の中からの復活」が象徴的に表されました。このように、主が十字架にかかられ、その墓が空になることが、主の公生涯の最初から生き生きと示されていたのです。

主が水の中から再び姿を現されたことによって、主の復活があらかじめ示されました。死と埋葬と復活によって、主は神の義の要求を満たし、罪人が義と認められる土台を備えられたのです。

罪のないお方なのに、カルバリの十字架で、私たちに代わって罪人となってさばきを受けて下さったイエス様、本当にありがとうございます。（福島勲）

貴重なご感想をありがとうございました。
次回はマナ７月号の感想を８月10日までに福島兄弟へお寄せ下さい。（永井）